

◎本会の動き◎

2018年度部会活動功労賞 (部会CT賞) The Award for Distinguished Service to SCEJ Divisional Activity

[部会CT賞表彰にあたって] (松方正彦 部会CT長)

化学工学会では、基盤技術分野として6部会および展開技術部会として8部会がそれぞれ横系および縦系として各学問分野での専門家集団を形成し、その分野の学会代表として積極的な活動を行っております。また、国際的にも我が国の研究者集団の代表として国際シンポジウムの開催を行う等、積極的に寄与致しております。このような部会活動は部会員の皆様の御努力によって支えられておりますが、特に若手会員の不断の貢献に因るものが大であります。この貢献に少しでも報いるべく2010年度より部会活動功労賞として部会CT賞が設けられました。

今回で9回目の表彰となり、引き続き貢献された個人のみならずグループにも表彰できる仕組みがあります。本年度は、企画、運営等の部会活動の活性化に大きく貢献された以下の2名の方を受賞者として選定しました。受賞者への表彰は、2019年3月に芝浦工業大学で開催されました年会初日の開会式にて行われました。受賞者のこれまでの献身的な貢献に感謝するとともに、今後とも部会を始め化学工学会の諸活動に御支援賜りたく、ここにお願い申し上げる次第でございます。

最後に、この度受賞されました2名の方に、心よりお祝いを申し上げます。

なお、第84年会における表彰式では、都合により、本部大会運営委員長 山口猛央氏より賞状・副賞を授与いただきました。

(以下、受賞者五十音順)

環境部会における企画・活動および広報活動への 長期間におよぶ多大な貢献

尾形 剛志 氏(産業技術総合研究所)

【環境部会】

尾形氏は、環境部会において、2008年度から現在まで10年間以上に渡り、部会の庶務幹事を継続して務めてこられました。その間、部会の企画、運営、活性化ならびに庶務活動において、以下のような顕著な貢献をされました。

環境部会では「環境部会が中心となり、環境に関する広範なテーマの特集を、化学工学会の論文誌に継続的に企画していく」という



右：尾形 剛志 氏
左：山口 猛央 本部大会運営委員長

方針のもと、化学工学論文集において3回、*Journal of Chemical Engineering of Japan*において2回の特集号を企画しました。

2010年 第36巻4号「地球環境とリサイクル」

2011年 Vol. 44, No. 10「Sustainable Chemical Engineering」

2012年 第38巻5号「水と大気と土の化学工学」

2014年 Vol. 47, No. 4「Sustainable Environmental Technologies」

2017年 第43巻4号「未来を担う環境化学工学会」

特集号は各号において多くの論文を集め、環境化学工学の最先端の成果を発信してきたものと考えます。尾形氏は、この特集号の企画立ち上げ段階から積極的に議論に参加し、また、特集号への論文の執筆、投稿された論文の査読においても多大な貢献をされました。また、環境部会は環境化学工学分野における学生の研究意欲の向上および学会発表の促進を目指し、2013年度の秋季大会から環境部会シンポジウムおよび環境部会が主催するシンポジウムにおける学生の口頭発表に対して優秀学生発表賞を創設しました。尾形氏はここでも企画の立ち上げに尽力し、庶務幹事として多大な貢献を果たしました。この環境部会シンポジウム優秀学生発表賞は2018年度の秋季大会においても継続して行われており、尾形氏は発表の審査等で継続的に貢献されました。

また、尾形氏は2008年度より部会のウェブページ担当者として、部会のホームページを刷新し、その後10年間以上に渡り、維持、管理、運営を一手に担ってこられました。部会が主催、共催および協賛するイベントの最新情報の公開、上述した化学工学会の論文誌における特集号の募集、環境部会シンポジウム優秀学生発表賞の周知など、重要な情報を継続的に発信し、部会活性化にご尽力されました。このような継続的なご尽力は高く評価されるべきものです。

さらに、2017年度の秋季大会においては環境部会シンポジウム「有用資源回収・リサイクル技術の最先端」のオーガナイザーを務め、企画の立案、招待講演者および座長の選定、プログラム作成など、シンポジウム開催にかかわる事務局作業を精力的に行われました。

上記のようなこれまでの環境部会への顕著な貢献実績とともに、今後の環境部会の益々の活性化、国際的な活動への貢献も大いに期待されることから、部会CT賞の受賞に相応しいと認められました。

基礎物性部会事務局としての献身的活動ならびに
国際会議MTMS18への顕著な貢献

松田 弘幸 氏(日本大学)

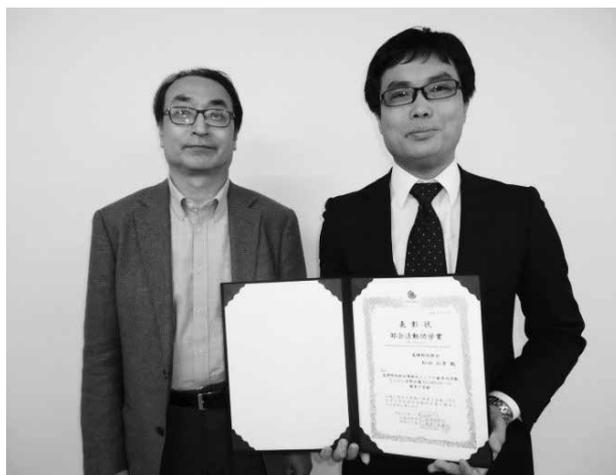
【基礎物性部会】

松田氏は2014～2016年度に、基礎物性部会の事務局担当として庶務、会計、ホームページ担当を務めました。その間、松田氏は円滑な部会運営やホームページの適切な管理・迅速な情報公開等に尽力されたことに加え、以下の4点において、特に顕著な実績を上げ、当部会の発展に大きく貢献されました。

- ①部会活動の活性化と会員増強を目的とした基礎物性部会著の専門書「物性推算とその応用」を企画・編集し、併せて本書を用いて化学工学会関東支部と共催で講演会を企画・運営されました。
- ②当部会ならびに超臨界流体部会主催の国際会議である「8th International Symposium on Molecular Thermodynamics and Molecular Simulation MTMS18」の事務局担当として、会議の成功に尽力されました。
- ③毎年AICHe Annual Meetingに参加し、相平衡関連セッションのco-chairを担当し、国際交流に尽力されました。
- ④上記の他、部会の庶務活動における貢献も顕著でした。

まず①については、部会活動の活性化を図るため、また、会員増強を目的として、基礎物性部会の会員を著者とする化学工物性に関する専門書「物性推算とその応用」を基礎物性部会著として、2016年1月に発行されました。本書について、松田氏が企画・編集者の一人として活躍し、合わせて、化学工学会関東支部と共催で、本書を用いた講演会として「最近の化学工学講習会65」を企画し、その運営にも従事され、当講演会は多くの参加者を得て、2016年1月21日(木)、22日(金)の両日に開催されました。本書の発行および当講演会の開催は、会員の研究内容を多くの方にアピールし、合わせて、当部会の実力を広く知ってもらうことによって、会員増加も期待できます。したがって当部会の活性化に対して、松田氏の貢献は非常に大きいと認められます。

次に②について、基礎物性部会と超臨界流体部会との共催事業であるMTMSは、3年毎に日本において当部会員が中心となり開催される熱物性と分子シミュレーションをトピックとした国際会議で、8回目の開催に当たるMTMS18は2018年9月5～7日に千葉県習志野市で開催されました。松田氏は事務局担当として、ホー



右：松田 弘幸 氏
左：松方 正彦 部会CT長

ムページの作成、予算管理、物品・飲食業者との折衝、アルバイト学生の配置と指導ならびに参加者への連絡窓口等、会議の運営・庶務全般において中心的役割を果たされました。また、本会議のホームページには、参加者への連絡事項、プログラム、交通案内等がタイムリーに掲載され、参加者の見やすさ・情報の得やすさに十分配慮された充実した内容が盛り込まれました。加えて、要旨集の作成(小冊子およびプロシーディングスも納めたUSBメモリー)や昼食などの飲食業者との折衝なども担当されました。さらに前回会議に比較して、MTMS18では、口頭発表は13件から19件に、ポスター発表は50件から67件に増加し、MTMSの国際会議としての地位を一段と向上させることに貢献されました。このことは、次回大会以降の円滑な運営に好影響を与え、松田氏が当部会の国際交流関係事業に対して大変優れた影響を与えたと考えられます。

③のAICHeに関しては、2016年以降毎年参加し学会発表に留まらず相平衡関連セッションのco-chairとして参加している点が特筆すべき点です。日本の物性研究を国際的にアピールし、さらにセッション参加を通じて国際交流に大きく寄与しています。このような日ごろの地道な積み重ねが②のMTMSの成功に寄与したと考えられます。

最後の④部会の庶務活動における貢献が顕著であった点については、部会長をサポートし、円滑な運営を進め、また、ニュースレターの編集・発行にも携わり、部会の行事案内や活動報告を積極的に発信しました。その結果、数多くの案件に対して、非常に迅速かつ丁寧に対応しているとの定評を得ました。

以上、松田氏は、①部会活動の活性化、②国際会議の運営、③国際交流への貢献、および④部会の庶務活動に対する貢献がどれも大であり、非常に優れた業績を挙げられたことは、当該部会発展にも大きく寄与されたと認められます。

以上の理由により、部会CT賞の受賞に相応しいと認められました。